

1 細胞領域さきがけが走り始めて5年が経過し、事後評価の時期となった。本領域の総括を打診された当時（今でも）、私自身はまだ全力疾走中の現役研究者であり、高みから広い分野の若手研究者をまとめるような役割ができるだろうかと感じたことを今も覚えている。その戸惑いと同時に、20年近く前に自分自身が「さきがけ研究者」であった頃の心の高ぶりを思い出し、現在の若手研究者にどんな枠組みを提供すべきかに想いを巡らした。

本領域を進めるにあたって基本軸としたことは、(1) 幅広い分野から異なるバックグラウンドを持った尖った研究者を集める、(2) 研究者の自由度を可能な限り確保する、(3) 彼らの個性・自主性を出来る限り尊重する、ことである。そのために、広い視野をお持ちで研究分野が異なる第一線の先生方12名にアドバイザーをお引き受け頂き、『さきがけらしい研究提案・人物』を選考するというコンセンサスのもと、書類審査と面接審査に全力を傾けた。提案書類だけでは分からない研究哲学が面接のDiscussionの中で明らかになることもしばしばであり、またアドバイザーの先生方の確かな眼力のお陰で、総勢39名の精鋭が選抜された。ScienceやCellといったトップジャーナルへの論文発表だけでなく、その成果を基にベンチャーの立ち上げや次のCREST研究代表者となるメンバーも現れるなど、彼らの活躍は我々の想定を超えるものも多く、日本の若手研究者のポテンシャルの高さを再認識するものとなった。また、研究者間での自主的なネットワーク形成も期待以上に活発に行われ、本領域の研究を大いに発展させただけでなく、次世代の潮流を産み出す礎となると感じている。これはヘテロな研究者集団の形成のお陰で、お互いの武器が相補的に個々の研究の発展に寄与することを多くの研究者が領域会議の中で実感したことが大きい。実際に、「普段の学会活動では出会わない異分野で同年代の研究者との交流が刺激的でポジティブ」という声を聞いている。

また、私自身も、サイトビジットや領域会議で個々の研究者と触れ合うことによって、その立場や環境が20年前に比べて遥かに多様化していることを実感した。本領域内では女性研究者2人が、ライフイベントを経験したが、彼女らへの対応はJSTあるいは国の仕組みとしてまだ不完全であると感じた。また、さきがけ研究者であると同時にPIとして研究室を主宰する若手が大幅に増えており、彼らの立場や意識は講座制の中のさきがけ研究者とは大きく異なっていた。さらに、地方大学や私立大学においては、さきがけ研究者と共に実際に研究を担う学生や博士研究員のマンパワー不足が深刻で、国全体の研究システムの持続性という点で極めて大きな課題である。今後は、多様な状況やニーズに柔軟に対応できる制度の改善が必要であり、それによって鼓舞される若手研究者も多いであろう。本領域のさきがけ研究者諸君が、そのような様々な困難を乗り越えながら将来大きく羽ばたいて、世界と伍する独創的な研究を展開することを心より祈念したい。

2019年秋：JST さきがけ1細胞領域研究事後評価資料より 研究総括所感 浜地